【 1 】

| | |
|---|---|
| 氏名 | 土井　達子 |
| 授与した学位 | 博　　士 |
| 専攻分野の名称 | 文　　学 |
| 学位授与番号 | 博甲第２４９５号 |
| 学位授与の日付 | 平成１５年　３月２５日 |
| 学位授与の要件 | 文化科学研究科人間社会文化学専攻<br>（学位規則第４条第１項該当） |
| 学位論文題目 | 狭衣物語研究 |
| 学位論文審査委員 | 主査・教授　渡邉　　護　助教授　田仲　洋己<br>助教授　江口　泰生　助教授　片山倫太郎<br>ﾉｰﾄﾙﾀﾞﾑ清心女子大学大学院文学研究科教授　工藤進思郎 |

## 学位論文内容の要旨

本論文は、『源氏物語』以後に成立した所謂後期王朝物語を代表する作品である『狭衣物語』を研究対象として、『源氏物語』の圧倒的な影響下にあるこの物語の構想や表現、登場人物の造形の在り方を精密に読み解いて、物語文学史の中に独自の位置を占める本作品の特質を明らかにすることを目的とするものである。全体は三章から成り、「はじめに」と「おわりに」が附随するが、A4 版ワープロ打ち１ページあたり約 1,200 字で計 148 ページ、四百字詰め原稿用紙に換算して約 440 枚の分量に達する。

論の冒頭に置かれた「はじめに」では、本研究のテーマ設定とその意義について簡潔な説明が為され、それを受けての本論第一章「狭衣物語の人々」においては、『狭衣物語』の主要登場人物である源氏宮・飛鳥井女君・女二宮・今姫君の４人の女性を個別に論じて行く。本章においては、とくに『源氏物語』の登場人物との関わりに考察の焦点が当てられ、先行研究の成果を踏まえた上で『源氏物語』の女性たちとの比較対照作業が綿密に展開されて、その造形面での特質や物語中に占める役割や機能といったことがらが解明されている。第一節「源氏宮―その虚像と実像―」では、『狭衣物語』全編の主人公たる狭衣大将と兄妹同然に育てられ、狭衣大将にとって永遠の思慕の対象であり続ける源氏宮の描かれ方の変遷と、物語中に占めるその位置付けが分析される。源氏宮の美しさの描出に特徴的に用いられている幾つかの語彙が『源氏物語』の雲居雁や明石中宮所生の女一宮の描写にも用いられている事実を指摘した上で、他方、光源氏のそれとも重なり合う部分があることを指摘する。さらに狭衣が言い寄る場面における『伊勢物語』を踏まえての設定の巧みさや、『源氏物語』の朝顔斎院、女三宮との造形の共通点等を指摘した上で、当初は狭衣の懸想を一方的に拒否していた源氏宮が徐々に狭衣に親和的な姿勢を示してくることの意味を論じている。第二節「飛鳥井女君」は、ことに『狭衣物語』の前半部において重要な位置を占める飛鳥井女君の造形を、その容姿・性格・境遇・登場場面等に即して分析し、狭衣大将の恋の遍歴を彩る飛鳥井物語の意義を読み解くものである。前節で考察した源氏宮と同じく、飛鳥井女君の容姿等の描写には特定の語彙が使用される傾向が明瞭に認められるが、その性格や境遇や恋の展開の様相、あるいは引歌の利用といった表現面の特質をも含めて、『源氏物語』の浮舟や、取り分け夕顔との類似が顕著であり、これまた『源氏物語』の圧倒的な影響下に生み出された人物像であることが確認される。第三節「女二宮」は、狭衣大将との契りによって若宮を出産しながらも世間的には母大宮の子であるとしてそのことを偽装し、出産後まもなく出家に踏み切って、以後狭衣を徹頭徹尾拒否し続ける嵯峨院の女二宮の造形を分析する。秘すべき契りによって懐妊し、その子を出産後に出家する皇族の女性という点では、既に指摘が為されている通り、『源氏物語』の女三宮との重なり合いが緊密であるが、狭衣大将の正妻が女一宮で思慕の対象がその妹の女二宮であるという関係は、宇治十帖における薫の正妻女二宮とその姉一品宮（女一宮）との関係に擬えられるものであり、ここでも『源氏物語』の人間関係を念頭に置きつつそれを逆立させる形で登場人物相互の関係が設定されるという仕掛を読み取り得るのである。第四節「今姫君

—女三宮と玉鬘から—」では、狭衣大将の父堀川関白の落胤として登場し、巻三以降において徹底して戯画化して描かれる今姫君なる女性について論ずる。「をこ者」としての今姫君の造形が『源氏物語』の末摘花や近江君のそれを受け継ぐものであることはよく知られているが、一方ではその人柄の幼さが繰り返し語られているのでもあって、『源氏物語』の女三宮と重なる叙述が多く見られる事実を指摘する。また、前宰相中将との思いもかけぬ契りが却って安定した結婚生活を齎すという境遇の設定においては、『源氏物語』の玉鬘の運命と軌を一にするところがあり、『狭衣物語』の人物造形が『源氏物語』の多様な人物像を如何に複雑かつ重層的に取り込んで為されているかということが明らかにされている。

第二章「狭衣物語の歌・ことば、自然・身体—女君をめぐって—」は、第一章で展開された登場人物論を承けて、主要な女性の登場人物の設定や造形の背後にあるものをさらに異なった角度から分析し、『源氏物語』の圧倒的な支配力下に成立しつつもまた独自の在り様を誇る『狭衣物語』の特性を見極めようとするものである。第一節「飛鳥井女君〈巫女〉〈遊女〉考—神歌から入水まで—」は、「水」のイメージと深い関わりを持ちつつ物語中に描き出される飛鳥井女君の在り方を、折口信夫の所謂「水の女」論を考察の核に据える形で多面的に読み解こうとする論である。考察の前提として、民俗学や近年の社会史研究によって得られた古代・中世の巫女・遊女に関する様々な知見を展望、整理した上で、既に幾人かの研究者によってその巫女性・遊女性が指摘されている『源氏物語』の夕顔の宿の女の設定や造形と対比しつつ、飛鳥井女君の描かれ方を見定めて行く。飛鳥井女君はその最初の登場の場面から催馬楽「飛鳥井」を介して「水」との関わりが深く、三輪山伝説を重ね合わせるような狭衣との恋を経て、虫明瀬戸で入水する。その飛鳥井物語の随所に鏤められた「水」そして「巫女」「遊女」の面影を喚起する様々な記号の配置——例えば、引歌に見られる「海士の子」のイメージ、入水の場面で重要な役割を果たす「扇」のシンボリックな機能——を精密に読み解き、「非日常の異空間に漂泊し、異界化された時空へ狭衣を招く女君」として飛鳥井女君の存在を規定する。第二節「女二宮における〈季〉と〈景〉」は、女二宮が特定の季節と関わってのみ物語中に登場することの意味を問い、女二宮物語を『狭衣物語』全編の中にあらためて位置付けようと試みるものである。女二宮は物語終末部において女郎花に譬えられるが、それまでも「秋」の場面に登場することが多く、「春」の女君として造形される源氏宮の対偶に位置すると理解される。ことに、出家後嵯峨に住むようになってからはほぼ一貫して「秋」の女君としての役割を担い続ける。しかしながら、巻二における懐妊中の姿は「夏」の「暑さ」「苦しさ」とともに描出され、さらに「秋」を跳び越えて荒涼たる冬景色の中に苦悩する心中が象られることになる。登場人物の心情を象徴するが如きこのような風景や景物の描写の在り方を、個別の表現に即して精緻に読み解き、自然描写が登場人物の心象風景たり得るという『源氏』以後の後期物語の表現のシステムが『狭衣物語』において一段と高度かつ洗練された次元で展開されていることを確認している。第三節「女二宮の身体をめぐって—心とことばと—」もまた女二宮論の一環を為すが、女二宮の身体に関わる描写、叙述を丹念に辿り、懐妊→出産→出家の各時点における女二宮の心身の在り方とその変容ぶりを論述する。さらに出家後の狭衣大将との関わりにおいても、女二宮の身体に即しての叙述が両者の距離と関係性を際立たせ、狭衣にとって女二宮が如何なる存在であったのかということを照らし出して行くという物語の機制を明らかにする。

第三章「狭衣物語の「衣」と「絵」」は、『狭衣物語』の随所に登場し、全編の構想の上で取り分け重要な機能を担っていると考えられる二つの事物、「衣」と「絵」に着目し、それらの事物がどのように扱われ操作されているかということを記号論的に読み解き、前章までの人物論とは異なった視点から、『狭衣物語』の主題と構造を解明しようとするものである。第一節「喩としての衣・形ある衣—「狭衣」の起点と行方—」及び第二節「衣の贈与の意味—人と人との間にとどめ置かれる衣—」では、物語の冒頭付近に出現する天稚御子による天の羽衣贈与の件と、それを受けての帝の詠歌に見られる「衣」の比喩の意味を分析し、帝の詠歌の中の「衣」に女二宮降嫁の寓意が認められることから贈与財としての衣と女性との類縁性を指摘する。その上で、物語中の「衣」が取り分け源氏宮と女二宮の比喩として機能する事実を確認し、それらの記述に潜められた多様な象徴性を精密に掘り下げて行く。また、狭衣が飛鳥井女君の兄の僧に贈与する白い衣についても、物語本文中に示される兄僧と阿私仙とのアナロジーを踏まえて、その機能と象徴性とを論じている。第三節「狭衣物語における「絵」をめぐって—交感の〈場〉の喪失を始発として—」は、物語中に頻出する「絵」を見る場面を詳細に検討し、そこから『狭衣物語』の独自性を垣間見ようとするものである。巻一の比較的最初の部分には、源氏宮が伊勢物語絵を見る場面が置かれているが、その様子を見た狭衣は源氏宮に言い寄るものの、源氏宮は狭衣を徹頭徹尾拒否し続ける。本論文はまずこの場面に注目し、人と人との交流、交感の場として本来作用するはずの「絵」がその機能を喪失した形で登場して来ることの意味を確認する。

その上で、物語全編に亘って「絵」の登場する場面を個別に分析し、『狭衣物語』が「絵」に担わせている独自の機能を読み取って行く。『狭衣物語』の中で「絵」との関わりがもっとも深い女君として造形されているのは源氏宮であるが、源氏宮に関連する形で登場する「絵」は、前述した冒頭近くの場面を典型として、狭衣大将との間に決して感情の交流を齎さない。他方、狭衣を実の父親としながらも世間的にはその事実が知られていない二人の子ども――女二宮腹の若宮と飛鳥井女君腹の姫君――と狭衣が慣れ睦ぶ各々の場面において、「絵」は極めて効果的な働きを担い、親子の間に親密な交感の場を造り上げて行く。さらに全編の綴目近くに出現する飛鳥井女君の形見の絵日記についても詳細な分析を行ない、『源氏物語』に語られる光源氏の須磨の絵日記の扱われ方等とも綿密に比較対照しながら、狭衣・故飛鳥井女君・さらに両人の子である姫君の三者の間に成立する魂の交感の場として飛鳥井女君の絵日記が機能していることを論証する。そして、『狭衣物語』の中に出現する「絵」は、時に登場人物同士のコミュニケーションの不成立を照射し、時に人々の間に親密な交流、交感の場を提供するという多義的な機能を担った存在であると結論付ける。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2002年2月4日、学内審査委員4名、招聘審査委員1名の計5名によって行なわれた。専攻分野による内訳は、国文学関係教員4名、国語学関係教員1名である。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、以下のような結論に達した。

審査委員が評価できるとした主要な点は、以下の如くである。

（1）『狭衣物語』の研究は近年著しく進展し、詳細な注釈書も何種類か刊行されて、中堅から若手世代の研究者の論文が毎年相当数発表されている。物語そのものに対する読みの精度も飛躍的に高まり、中世以来膨大な蓄積のある『源氏物語』研究の成果等をも取り入れて、物語全編の構想から修辞の細部に至るまで活発な議論が展開されている。本論文はそのような『狭衣物語』研究活性化の現状をよく踏まえ、数多くの先行研究を普く視野に収めながら、自らの論を展開している。と言うよりもむしろ、本論文の筆者もまた、『狭衣物語』研究活性化の一翼を担う若手研究者の一人であると評価すべきであろう。『狭衣物語』の研究史をよく理解し、先行研究の成果を十分に咀嚼した上で自らの論を進めるという姿勢が一貫していることは、研究者にとって当然の基本的態度であるとは言え、相応の評価に値するものである。

（2）『狭衣物語』には膨大な数の伝本が存在し、伝本間の本文の異同が甚だしいために、多種多様な異文を参照しながら本文を整定するのは至難の作業である。しかしながら、近年この分野においても研究が進み、鎌倉期の古写本である深川本の影印が刊行され、代表的な古伝本の翻刻を収めた『狭衣物語諸本集成』のような書物が編まれる等、諸本研究の成果が様々に公刊されている。本論文は、このような『狭衣物語』諸本の問題にも広く目配りし、深川本を底本とする新編日本古典文学全集本（小学館刊）をテキストに定めながら、他系統の代表的な伝本の本文をも参看しつつ、必要に応じて異文の問題にも踏み込んで、論を進めている。この手続きも国文学研究の基本的なスキルであるとは言え、本論文の研究方法の着実さを裏書するものとして評価される。

（3）平安期の物語研究において、登場人物ごとにその描かれ方を論ずる所謂人物論は、様々な研究方法の中でも比較的テーマの設定が容易であるためか、とくに『源氏物語』研究の領域においては論文が量産されている。しかしながら、ある登場人物の描かれ方を考えることは、その人物が登場する個々の場面の設定の意図や、物語全体の構想・構造を読み解くことにそのまま直結する作業であり、そのような視座を持たない人物論は、研究の名に値しない感想文の羅列でしかない。本論文第一章の人物論は、『源氏物語』の圧倒的な影響下に成立した『狭衣物語』の文学史的位置を十分に見定め、『源氏』から様々の影響を受けつつも独自の世界を切り拓くことに成功したこの物語の在り方をよく照射するものとなっている。ことに第四節の今姫君論はすぐれた出来映えで、従来の研究において閑却されていた『源氏物語』の女三宮や玉鬘との造形の類似を指摘し、その意味を粘り強く考察している点は、高く評価される。この第四節の根幹を為す部分は既に雑誌論文として公表されているが、学界においても一定の評価を受け、他の研究者の論文中に引用、紹介されている。

（4）第二章第一節の飛鳥井女君論にとくに顕著であるが、文学研究の領域の先行論文にとどまらず、民俗学や歴史学研究の多様な成果をも積極的に取り入れて、自らの論を組み立てて行こうとする姿勢は評価される。また、第二章の各節では、身体論をはじめとする幾つかの新しい視点を導入して読みの精密化を図り、第一章の各節で展開された登場人物論を発展させつつ、『狭衣物語』全編の構造分析に直結する注目すべき論点の提示に成功している。第一節では、「水」に関わりの深い女君としての飛鳥井女君の造形の在り方を多面的に読み解くことによって、『狭衣物語』全編中に占める飛鳥井物語の位置付けを巧みに炙り出している。第二節・第三節においても、女二宮の描かれ方を物語の行文の具体的な表現に即して分析することによって、その特異な造形の在り方を支える物語の論理といったものを捉えることに一定の成果を挙げている。

（5）第三章は、本論文の中でも中核となるべき部分であり、従来の研究の水準を超えた緻密で斬新な論を展開する。物語の題名と主人公の呼称にも繋がる「衣」への注目については先行の論も存在するものの、物語の随所に登場する「絵」を見る場面に着目して、『源氏物語』とはまた異なるその扱われ方を緻密に分析して行くという第三節の内容は、『狭衣物語』研究の新たな地平を切り拓くものとして、高い評価に値する。人々がともに同じ絵を見ることによって形成されるはずの共感の場がことに物語前半における狭衣と源氏宮との間には成立していないという指摘は、よく的を射たものであり、そこに『狭衣物語』の特質の一つが見出されるという分析にも無理はない。また、これとは対照的に、狭衣と他者との心の交流を速やかに成就させるような「絵」の働きも物語中に見られるのであって、本論文は極めて目配りよくそのような「絵」の多彩な機能を腑分けして、『源氏物語』とはまた異なる物語世界がそこに開けていることを論証している。本節の骨子に当る部分は、平成 13 年度中古文学会秋季大会（於九州大学）で口頭発表されたものである。審査委員中の工藤・田仲の両名はこの学会に参加していたが、会場における質疑等を通じて、当日の出席者からも高い評価が得られていたと判断している。総じて第二章・第三章の各論は、分析の視点の設定が新鮮かつ巧みであり、『狭衣物語』の構想の独自性を説得力ある形で提示することに成功している。

以上のような評価を得ながらも、その一方で、以下の如き幾つかの問題点や残された課題についての指摘も為されている。

（1）先述した如く、『狭衣物語』には多くの伝本があり、錯綜した異文の処理が大きな課題となっている。本論文は、そのような『狭衣』諸本の問題にも広く目を配っているが、その異文の扱い方に必ずしも万全ではない箇所が若干ながら存在する。諸本間の本文の異同が大きい場合には、個々の本文の良否をさらによく吟味すべきであろう。

（2）先行研究に広く目を配り、隣接領域の研究成果をも積極的に取り入れて行こうとする姿勢は評価に値するが、その理解が果たして十分なものであるか否か、やや不安が残る部分がある。例えば、第二章第一節で論及する折口信夫の「水の女」論は読み手の詩的な感受性までもが問われる極めて難解な論文であるが、その深い含意をどこまで汲み取って論述に活かしているか、やや表面的な底の浅い理解に止まっているのではないかという懸念が審査委員の側から表明されている。

（3）上記の（2）とも関連するが、近年の物語研究でしばしば用いられるやや特殊な語彙を、その概念規定や用法の入念な吟味を行なわずに用いているところが見受けられる。例えば、最近の『源氏物語』等の研究論文では表現分析上のタームとして「喩」という言葉を用いる論者が少なくない。本論文においても、先行研究の論述を承けて「喩」という用語を使っている箇所があるが、そのタームを自らの研究に用いる必然性を十分に説明することなく、やや無批判に取り入れているのではないかという指摘があった。

（4）とくに論文後半の第二章・第三章に顕著であるが、文章にやや難解なところがあって、一読しただけでは論旨が把握しにくい部分がある。よく言えば個性的な文体という評価になるのであろうが、学術論文としては、より平明な文章を目指すべきである。

（5）『源氏物語』との関わりについては、考えるべき問題がまだ数多く残されているのではないかという指摘があった。例えば、第一章第三節に置かれた女二宮論であるが、狭衣大将と女二宮・女一宮との関係は『源氏物語』における薫対女一宮・女二宮の関係に相似するという指摘の妥当性は疑い得ないものの、女二宮の物語が皇女の結婚拒否という主題を担っていることを考え併せるならば、『源氏物語』の柏木対女三宮・女二宮（落葉宮）の関係についても比較対照して検討を加えるべきであろう。また、第二章第二節では、秋の女君としての女二宮を論ずるに際して洛西嵯峨野の秋の風景描写に論及するが、ここでも『源氏物語』賢木巻や松風・薄雲巻に見られる嵯峨野の秋から冬にかけての風景との関わりが論じられて然るべきである。

しかしながら、新しい視点から『狭衣物語』を読み抜き、従来の研究において気付かれていなかった様々な問題点を指摘しつつ物語の特質と構造を精細に分析した本論文が、『狭衣物語』研究の現状に新たな一石を投ずるだけのすぐれた価値を有することは疑いない。上述したような問題点や課題の指摘は言わば瑕瑾であり、『狭衣物語』研究の将来を担い得る若手世代の研究者の一人として学界で認知されている本論文の筆者が、今後自らの研究の幅を一層広げ深めて行くことが期待されるのである。

審査委員会は、以上のような諸点を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。